



和水町教育委員会では、例年2月に生涯学習の推進を目的とした「生涯学習推進大会」を開催していますが、令和2年度は、新型コロナウイルス感染拡大の状況から中止となりました。しかし、大会という形ではなく、別の方法で生涯学習の推進を図れないかと考え、令和2年度の「生涯学習推進大会」で講演していただく予定でした北朝鮮による拉致被害者である『蓮池薫氏』に、講演会テーマに基づいた寄稿を依頼しました。『蓮池薫氏』の体験から、拉致問題による人権侵害問題について、考えるきっかけとなれば幸いです。

拉致問題による人権侵害問題

夢と絆

拉致は人間にとって何よりも大切な人生の夢とともに、家族の絆を奪う、絶対に許されない行為です。命以外のすべてを奪い去るのが拉致なのです。

北朝鮮が本格的に日本を始め海外から拉致をし始めたのは1970年代後半からです。秘密工作機関によるものですが、最初は秘密のベールに包まれていました。しかし、逮捕された工作員の供述などから次第に真実が明らかになり、1997年に拉致被害者の家族たちが会を結成して救出するための運動を始めました。日本政府も動き、2002年には小泉総理の訪朝により拉致問題が大きく動きました。北朝鮮は拉致を認め、日本側が提示したリストに対し、生存者5人、死亡者8人、1人未入国という回答を出してきました。しかし、死亡者について出された根拠は、まった

く信ぴょう性がありませんでした。家族会や政府は受け入れず、さらなる真相解明と拉致被害者の帰国を19年にわたって求め続けてきました。

拉致問題が進展しない最大の理由は北朝鮮当局が解決に向けた決断をしないためですが、米朝間の対立もその大きな障害になっていると考えられます。北朝鮮は日本と国交を結び、植民地統治に対する賠償を手にするために、拉致問題を動かしましたが、その後は核・ミサイル開発のため国際的非難を受け、日朝間の国交正常化は難しい状況になりました。米朝間で非核化問題が進展してこそ、拉致問題の解決も期待できるような状況となり、家族の皆さんはトランプ政権下での米朝協議に大きな期待をしました。しかし、ハノイ会談で頓挫してしまいました。バイデン新政権下でも簡単には非核化が進みそうもありません。今こそ日本政府が主導的に動いて拉致

被害者帰国の道を何とかして切り開いてもらうしかないというのが私たちの強い思いです。

私と妻が拉致されたのは1978年7月31日です。実はこの年の6月、8月の3カ月間に現在日本政府が認定している拉致被害者17人のうち9人が拉致されました。トップの指示のもと北朝鮮の秘密工作機関が、自らの対外情報活動に必要な外国人を確保するために拉致をしました。具体的には外国人を自らの工作員として育て上げ、利用しようというのが当初の目的でした。

当時恋人同士だった私と妻はその日デートの約束をし、柏崎市の中央海岸に夕焼けを見に行きました。砂浜にはかなりの人が出ていましたが、彼らとは少し離れたところに腰を下ろして話していたところ、ある中年の男がたばこの火を貸してくれと言って接近してきました。彼は北朝鮮の工作

員であり、拉致グループの責任者でした。それを知る由もない私が火をつけてあげようとしたところ、突然背後から数人の男たちに襲われました。工作員の配下の戦闘員たちでした。彼らは私たちを制圧したあと、暗くなると同時に袋詰めにし、迎えにきた工作船に乗せました。こうして私たちは船で北朝鮮へと連れて行かれ、途中で別々にされてしまいました。

北朝鮮の清津というところに着いた私は10日ほど監視されたあと、監視のもと首都の平壤に連れて行かれ、郊外にある招待所というところに入れられました。招待所は工作員の秘密養成施設です。私は、そこで「彼女は日本に帰した」、「お前を革命家に育てる」と言われ、思想教育を受けさせられました。最初は反発しましたが、死の恐怖を感じたため、応じるしかありませんでした。

1年後、変化が起きまし

た。突然工作員教育が中断され、私と家内は再会して結婚しました。この背景にはレバノン人女性拉致事件という国際事件が関連していたと見られます。結婚後、私は北朝鮮の若い工作員に日本語を教える仕事をさせられましたが、これも1987年末に中断しました。今度は北朝鮮の秘密工作機関がかかわった大韓航空機爆破事件が背景にありました。その後私は帰国するまで翻訳の仕事をさせられました。

1990年代に入ると、社会主義陣営の崩壊などによって北朝鮮の経済は破たん状態に陥りました。94年に金日成が死亡し、金正日が権力を握ると、経済再生のために2002年9月小泉総理を平壤に招いて、日本との国交正常化の道を探りましたが、その過程で拉致を認めました。

同年10月北朝鮮当局は生存者の私たち5人を、子どもたちを北の地に置いたま

ま日本に一時帰国させました。子どもたちは私たちを再び北朝鮮に戻らせるための人質でした。しかし、私たちは日本に残って子どもたちの帰国を待つことにしました。つらい日々が続きましたが、約1年8カ月後に小泉総理の平壤再訪問によって子どもたちは日本に來ることができました。

しかし、我々5人の帰国以来、他の拉致被害者は誰一人帰国を果たしておりません。拉致被害者のご両親の方々は次々にこの世を去り、今は横田めぐみさんのお母さまと有本恵子さんのお父さましか存命されておられません。もう待つことはできません。北朝鮮当局に強いプレッシャーをかけるとともに、日本政府がより主導的かつ力強く拉致問題に取り組むよう、多くの国民のご協力をお願いする次第です。

令和3年2月

蓮池 薫